２０２３年度

愛 知 の 生 活 科 教 育

（第２９集）

も く じ

Ⅰ　はじめに　……2

Ⅱ　第 73 次教育研究活動の概要　……2
　１　教育課程編成にあたっての基本的な考え方
　２　県内の自主的研究活動の取り組み状況

Ⅲ　授業実践
　実践１　（名古屋・広路小・金森　喜代孝）……3
　実践２　（瀬　戸・にじの丘小・近藤　彩子）……6
　実践３　（蒲　郡・西　浦 小・山田　りか）　……9

愛知教職員組合連合会　教育課程研究委員会生活科部会
２０２３年度　　教育課程研究委員

ブロック推薦者　　◎部長　○副部長

名　古　屋			尾　張			三　河		
氏　名	単組	分会	氏　名	単組	分会	氏　名	単組	分会
◎東江　克佳	名古屋	八熊小	成瀬　充晃	愛　知	(日進)北小	○松井　浩子	田　原	野田小
○中新　良介	名古屋	大高小	梶田　尚吾	春日井	八幡小	村上　泰子	幸　田	南部中

第 69 次～第 72 次教育研究全国集会リポート提出者

69 次			71 次			72 次		
氏　名	単組	分会	氏　名	単組	分会	氏　名	単組	分会
一柳　聡志	名古屋	鶴舞小	近藤　香奈子	春日井	岩成台小	池上　彩花	豊　川	牛久保小

第７３次教育研究全国集会リポート提出者　　勝股　彩加（春日井・坂下小）

Ⅰ　はじめに

生活科教育の分科会では、栽培活動を通して、植物への思いや願いをもち、思考を深めた実践、身近な自然を生かした遊びやおもちゃづくり等、主体的に対象とかかわる活動を通して、対象への愛着を深め、自信や自己肯定感の高まりをめざした実践など、15 本のリポートが提出された。以下、本次教育研究活動の概要をまとめた。

Ⅱ　第 73 次教育研究活動の概要

１　教育課程編成にあたっての基本的な考え方

○　「基礎・基本」について

子どもたちは具体的な活動や体験を通して対象や自分自身についての気付きを得ていくことが生活科の「基礎・基本」となる。「基礎・基本」を身に付けるためには、子どもたちが繰り返し対象とかかわることができるような活動の時間や場所を保障することが大切である。また、仲間とのかかわりがもてる場を意図的に設ける必要がある。

○　「生きてはたらく力」について

子どもたちにとって「生きてはたらく力」となるためには、活動して終わりではなく、しっかりと振り返り、気付きを自覚させることが大切である。そのためには、自分の活動を記録に残したり、具体的な活動や体験を通して得た気付きが、活用できるような場面を設定したりする必要がある。

２　県内の自主的研究活動の取り組み状況

本次の研究活動においては、充実した実践研究活動がなされた。多くの学校で、目の前の子どもの姿をとらえるとともに、教育課程の編成に明確な方針をもち、その方針に沿って具体的な手だてを設定して授業づくりに取り組んでいる様子がうかがえた。

本次の特徴としては、子どもたち一人ひとりの思いや願いの実現にむけて、主体的に対象へかかわらせている実践が多くみられた。また、仲間や園児、地域の方等、さまざまな人とのかかわる場をもち、対話的な活動の充実をはかる実践が多くみられた。生活科を通して子どもたちの自立の基礎が養われていく確かな実践がすすめられていることが感じられた。

本次の研究集会では、発表時間は５分、発表を学年別の配列とした。総括討論では、「生活科でどのような力を育成するか」「気付きの質をどのように高めていくか」をテーマに話し合ったことで、充実した討論が行われた点が評価される。

Ⅲ　授業実践

実践１　協働的な活動を通して、自分の思いや気付きを伝えることができる子どもの育成	１年（６時間）
単元　「がっこうと　なかよし」	

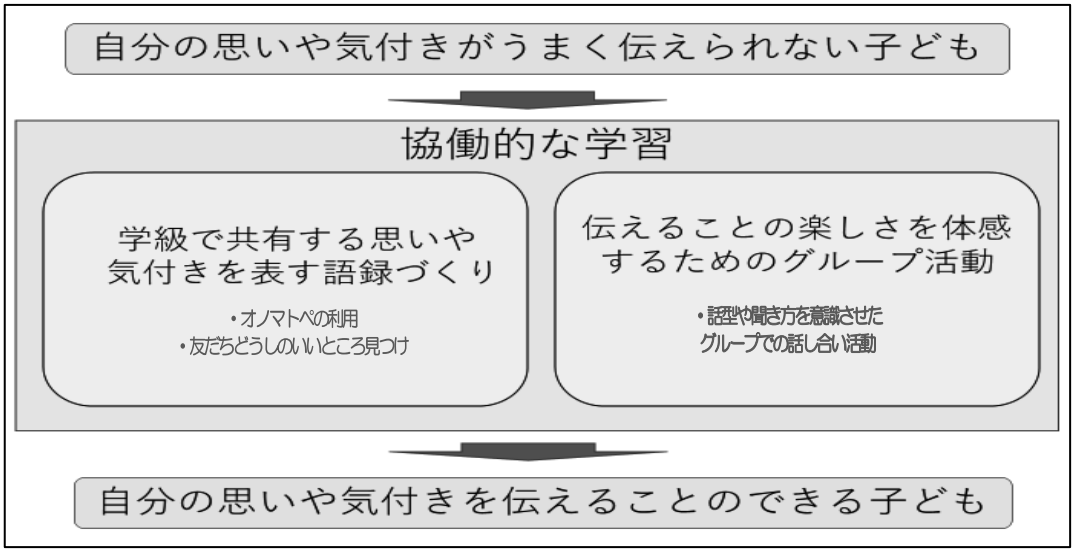
１　実践のねらい

⑴ 子どもの実態

本学級の子どもは、入学してから意欲的に学習に取り組む姿がよくみられる。国語科や算数科では、発言するときに元気よく挙手をしたり、字を書くときにていねいに書こうという気持ちをもって取り組んだりしている。しかし、生活科の学習で植物の種を見て気付いたことを表現したときに、種をよく見てかくことはできていたが、教員が種の様子や見ていて気付いたことを尋ねても、自分の思いや気付きをうまく言葉にすることができる子どもは少なかった。国語科や算数科の学習と違い決まった答えがないものについて、自分の思ったことや気付いたことを表現することにまだ慣れていないように感じた。また、教員とのかかわりをもって学習に取り組むことはできても、友だちに思いや気付きを伝えたり聞いたりするなど、友だちとかかわり合って活動するには至っていないように感じる。

⑵ めざす子ども像

私は、子どもたちが協働的な活動を通して、自分の思いや気付きを友だちに伝えることができるようになってほしいと願っている。協働的な活動とは、子どもどうしが自分の思いや気付きを伝え合いながら学習に取り組んでいく様子と定義する。学級の子どもたちにこれから必要なものが何かを考えると、生活科の学習だけでなく、これからの学校生活で自分の考えを相手に伝えていくことが大切だと考えた。そして、活動や体験を通して、友だちとのかかわりから相手の意見を聞き、新たな思いや気付きを得ることができるようになってほしいと考える。そのような子どもを育てるために【資料１】の流れで実践を行っていく。



【資料１　実践の流れ】

２　活動計画

⑴ **単元計画**　「がっこうと　なかよし」（６時間完了）

⑵ **具体的な手だて**

【手だて①】学級で共有する思いや気付きを表す語録づくり『にこにことば』

１年生は、入学したばかりで語彙が少ない。また、思いや気付きをまとめるときにどんな言葉を使うといいか考える力に個人差がある。そこで、オノマトペや友だちの考えを紹介して、学級で言葉を共有しながら思いや気付きを表す語録をつくっていく。そうすることで、互いの思いや気付きを伝えやすくする。

【手だて②】伝えることの楽しさを体感するためのグループ活動『わくわくたいむ』

１年生は、全体に発表したり友だちに伝えたりすることにまだ慣れていないので、生活科やその他の学習でもグループで意見を伝え合う「わくわくたいむ」を設け、友だちと伝え合うことが楽しいと体感させ、経験を積ませる。そうすることで、自分の思いや気付きを相手に伝える力を育むことができるようにする。

３　活動の概要

子どもたちが学校生活に慣れてきた５月の半ば頃に、学校のさまざまな教室や施設を見学するツアーを企画し、スタンプラリー形式で学校を探検した。ツアーで見学した教室や施設は、理科室、音楽室、図工室、図書室、調理所、保健室、家庭科室、職員室、放送室、応接室、体育館である。

見学の際には、その教室や施設にどんなものがあるか、何をするところかを教員が伝えながら探検した【資料２】。このツアーから自分が知りたい場所を決めさせた。

ツアーの後に、自分がもっと知りたい教室を一つ選び、それぞれ知りたい教室ごとにわかれてもう一度見学を行った。この見学では、その教室をさらに詳しく見る時間を設けるとともに、その教室を使用している先生や子どもにインタビューをする機会も設けた。また、見学した教室の様子をまとめるためにワークシートを用いた【資料３】。ワークシートには、その教室にあったものの絵を描くだけでなく、「何をするところ」「あったもの」「どんな感じ」を記述する箇所(①)を設け、そこから自分の思うスポット名をみんなでつくった「にこにことば」を用いて書かせるようにした。

見学後、学級で出し合った様子や気持ちを伝える「にこにことば」をもとに、その教室がどんなスポットであるかを書くようにした(②)。

【資料２　　学校探検の様子】

【資料３　　ワークシート】

その後、ワークシートを用いて、生活科グループ(わくわくグループ)の友だちに自分が調べた教室の様子を「わくわくたいむ」で紹介させた。その後、友だちとスポット名のアドバイスをし合い、それを参考にスポット名を決めた。決定後、わくわくグループで、他の友だちに自分のスポットを紹介するツアーを企画した。ツアーを行う前に、わくわくグループの友だちと、どのような順路で紹介していくか話型を用いて、話し合いを行った。話し合いでは、自分の思いを「ゴールを教室にして、遠回りにならないように回ろう。」と話型を用いて述べている子どもの姿がみられた【資料４】。

【資料４　友だちに伝える様子】

【資料５　ツアーで応接室に来た子ども】

また、他のグループの友だちがどのような順路で回るか、どんなスポットかがわかるようにツアー用の色塗りシートを作成させた。作成後、実際に前半、後半の２回に分けて活動に取り組んだ【資料５】。ツアーでは、自分が紹介したい教室について、「ここは、家庭科室です。わたしは、わくわくスポットと名付けました。」と自分の思いを友だちに伝える様子がみられた。

４　実践のまとめ

成果と課題(成果…○　課題…●)

○　学級で、オノマトペの紹介や友だちの意見の紹介を行うことで、自分の思いや気付きを伝えることができる子どもが増えた。

○　グループでツアーを企画したり、スポットを紹介したりすることによって、自分の思いや気付きを伝えることが楽しいと感じる雰囲気を作ることができた。

●　子どもにどうして「〇〇すぽっと」と名付けたかをツアーの時に伝えさせなかったため、ツアーに参加した子どもの中で、「どうして？」と疑問に思う場面があった。

●　順路を決めるときに、自分の思いを大切にしたいために、友だちの意見に耳を傾けることができない子どもがいた。

本実践では、協働的な活動を通して、自分の思いや気付きを伝えることができる子どもを育成するために、手だて①「にこにことばば」と手だて②「わくわくたいむ」の二つの手だてで実践を行ってきた。子どもたちは、学級で共有した思いや気付きを伝える言葉を用いて自分の思いをいきいきと伝えたり、グループでの活動で、自分の思いや気付きを意欲的に伝えたりすることができていた。今後は、学級共有の言葉をさらに充実させていくとともに、より多くの友だちに自分の思いや気付きを伝えることができるように生活科の学習を行っていきたい。

実践２　自分自身への気付きへと高める生活科学習　　１年（２３時間）

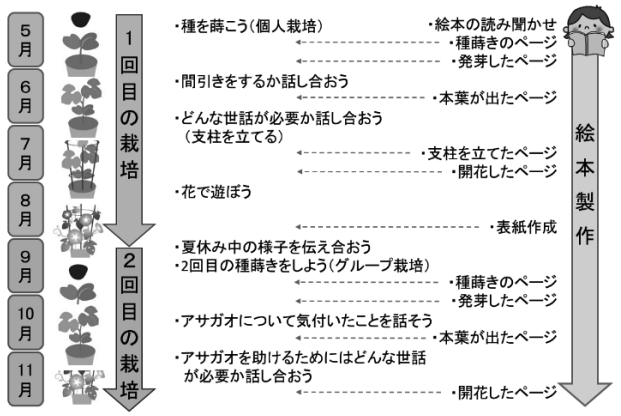
―１年生　アサガオ絵本の実践を通して―

単元　「きれいにさいてね」

１　実践のねらい

生活科において「気付きの質を高める」とは重要なテーマであり、これまでにさまざまな研究が行われてきた。新しい教育課程に記載されている究極的な姿に迫るためには、自分自身への気付きへと高めていくことが大切であると考える。しかしながら、対象への気付きを高めていくだけでは、自然に自分自身への気付きへと高まっていくことは難しい。活動を通して「なにができるようになったのか」「自分のどこに課題があったのか」など、自己を客観的に振り返ることで、自己の変容や成長をとらえ、自分自身への気付きを自覚することが可能になるのである。本単元では、子どもたちが持ち前の表現力を生かし、自然と振り返りをするために「アサガオ絵本」を製作する活動を取り入れた。子どもたちがアサガオの目線を通して、自分自身がどのようにアサガオとかかわりどのような活動をつくりあげたかを子どもの言葉で表現していくことで、自己の成長に気付かせたい。

２　活動計画（２３時間完了）



学習単元：

「きれいにさいてね」アサガオの栽培活動

主たる内容（７）動植物の飼育・栽培

従たる内容（８）生活や出来事の伝え合い

（９）自分の成長

学習時期：５月～１１月

アサガオの栽培を１年間のうちに２回行う。

１回目５月～（個人栽培）

２回目９月～（グループ栽培）

３　活動の概要

(1)　アサガオ絵本の製作（手だて①自分自身について気付く表現活動）

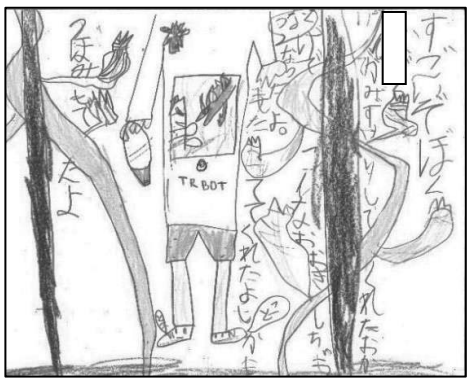
春、アサガオの種蒔きを終えた後、絵本を子どもたちに読み聞かせた。この絵本は、学級の子どもたちと同じような年頃の女の子が植物の種を蒔いて世話をする話である。種が喋り、物語を展開していく。話が終わると「私たちと一緒だね」とつぶやいた子がいた。自分たちも絵本をかいてみたいという気持ちが高まり、学級でアサガオ絵本の製作が始まった（資料１）。

資料１ アサガオ絵本をかいている様子

絵本製作には、八つ切りの画用紙を使用した。枠も記名する欄も設けず、子どもたちがかきたいものを自由に描けるようにした。絵本のページを描くタイミングは、子どもたちのかきたい気持ちが沸き上がったときになるよう、教員からは設定しなかった。本葉が出たときや支柱を立てたときなど、子どもたちが「かきたい」と言ったときに画用紙を渡した。

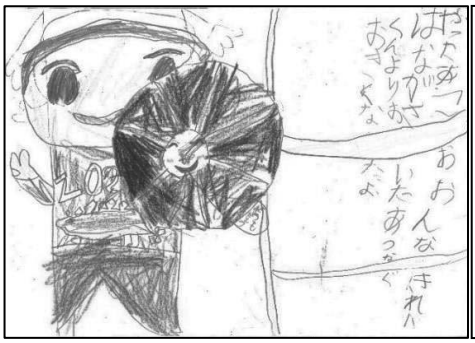
読み聞かせた物語になぞらえて、子どもたちが製作する絵本の主人公はアサガオとなった。アサガオの視点で自分自身の活動を客観的にとらえたり、アサガオの気持ちを想像することでよい世話の仕方ができたか振り返ったりしていた。

資料２は支柱を立てた後にかいたＡ児のアサガオ絵本のページである。線②「Ａくんがみずやりしてくれたおかげでこんなにおおきくなったよ」からは、自分が一生懸命に水やりを続けられたことを振り返り、それがアサガオの成長につながっていることに気付いたことがわかる。線①「すごいぞぼく」からも、こんなに大きく成長したアサガオへの驚きと、大きく育てあげることができた自分を誇らしく思っている気持ちも読み取れる。



資料２　Ａ児の絵本（支柱を立てた後）

資料３は同じＡ児の開花の場面である。線③「やったあ。こおおんなきれいなはながさいたあ」と開花の喜びを余すところなく表現している。前回は首から下が描かれていたが、今回は全身が描かれていた。自分よりも大きくなったアサガオを見て、満足していることがよくわかる。アサガオから吹き出しが付けられ「どうもありがとう」と言っていることからも、対象から感謝されるに値するくらいアサガオとかかわりをもち、開花まで世話を続けてこられた自分のよさを実感していることがわかった。

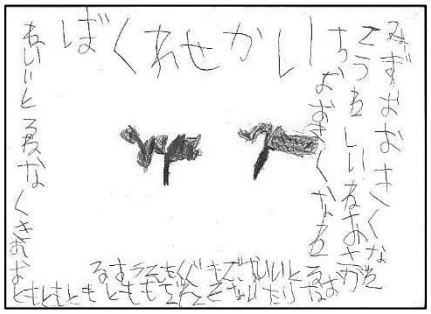


資料３　Ａ児の絵本（開花）

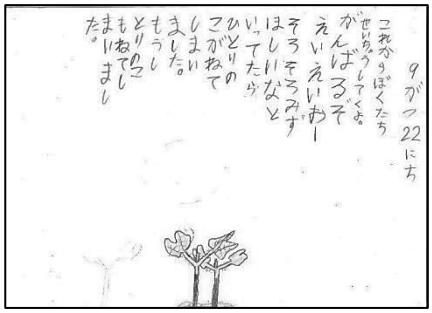
⑵　アサガオ絵本の比較（手だて②自分の成長を比較できる繰り返し活動）

９月から２回目の栽培を行ったことで、比較時期が明確になり、低学年でも変容をとらえやすくなった。

１回目のページを描く頃、Ｂ児は文章の正しい書き方を知らなかった。思いついたところから書き始め、書いた先にスペースがなくなると折れ曲がるということを繰り返した結果、画用紙に渦巻を描くように文字を綴った（資料４）。


資料４　Ｂ児の１回目のページ

２回目の同じ成長段階でかいた絵本では、授業で学習した文章の書き方が生かされており、行を意識して書くことができた（資料５）。絵も細部まで描き込まれており上手になっていた。２枚のページを見比べたＢ児からは「なにこれー！読めない！こんなの書いていたんだね」と声が上がった。文字の形が整い、絵も特徴をとらえて表現できるようになっているところからも自己の成長を実感することができた。


資料５　Ｂ児の２回目のページ

内容に関しても変化がみられた。Ｃ児は１回目の種蒔きのページに「みんな上手に育ててくれるかな。種が心配そうです。」と書いた。まだ経験のないこれからの活動に見通しが立たず、不安な気持ちが表れている。それに対して２回目には「みんな、アサガオたちに応援し

ました。がんばれがんばれと応援しました。」と表現した。今の自分には大きく育てられる自信があり、成長した姿を見るのが楽しみで仕方がないことがうかがえる。今の自分の方が成長しており「よりよい栽培活動ができるようになっているはず」という強い思いをもつことができた。その思いがC児の意欲を高めたのである。

⑶　アサガオ絵本の共有（手だて③自分や相手の成長を見つける認め合い活動）

絵本というものはかくだけでなく、読み物としても子どもたちの身近にある物である。自分たちが作ったアサガオ絵本を友だちに紹介したり、読み合ったりする場を設定した。C児は、自分のアサガオ絵本を読んだ友だちから、「絵が上手に描けていて、上手だなって思った」と感想をもらった（資料６）。自分でも絵をうまく描けるようになったと感じていたところに、さらに他者から重ねて認められることで、「やっぱり自分は上手になったんだ」と自己に関する認知を強固にすることができた。友だちの絵本のよさを一つ発表すると、星形の「いいねマーク」を黒板に一つ貼った。授業後にはたくさんの星マークが集まり、子どもたちはたくさんの成長を実感し、満足そうだった。また、アサガオ絵本のページは屏風のようにつなげていったので、床に広げると長い川のようになる。その長さからも今まで自分たちががんばってきた月日と、成長を振り返ることができた。

資料６　アサガオ絵本を紹介する様子

４　実践のまとめ

○　絵本製作を行ったことで、栽培活動を広い視野でとらえ、アサガオが大きく成長したのは、自分が世話を一生懸命にできたからだと自分自身について気付くことができた。

○　アサガオ絵本のページを１回目と２回目で比較することで、以前の自分と現在の自分の活動の様子やできるようになったことを比較し、振り返り、成長したことを実感することができた。

●　課題としては、子どもたちの成長についての教員の見取りが正確とはいいきれないということがあげられる。丁寧なエピソード記述を積み重ね、子どもの認知の変容や、成長の姿を大切にしていくことが求められる。

最後に、資料７は、D児がアサガオ絵本の最終回をかくと決めて取り掛かったページである。ラストは「わたしは」と自らが語るように書き始めた。そこには「自分ががんばったこと」「いろいろなアサガオに対する知識が身についたこと」「花の栽培が好きになったこと」など、自分が成長した姿をとらえ、子どもらしい言葉でたっぷりと表現することができた。自己の成長に気付き、実感した子どもたちは、今後も身のまわりの自然や社会とのつながりによさを感じ、かかわりを深めていくことができるであろう。そして、世界が広がり、日々の生活を豊かにしていくことができると考える。

資料７　D児のアサガオ絵本最終ページ

実践３　自然のよさに気付き愛着をもつ子の育成　　１年（１５時間） －１年「きじっ子の森」とあそんでなかよしの実践を通して－ 単元　「『きじっ子の森』とあそんでなかよし」

１　実践のねらい

対象児童は、外で遊ぶことが好きで、前単元「いきものとなかよし」では、すすんで虫を見つけたり捕ったりすることを楽しんだ。さらに、学校探検などでは、本校の裏山にある森「きじっ子の森」を楽しく散歩する姿がみられ、子どもたちは「きじっ子の森にもう一度行きたい」「次は木の枝を持って帰りたい」などの思いをもった。しかし事前アンケートで、半数以上の子が授業以外で森や山に行った機会が乏しく、自然の中で遊ぶ経験が少ないということがわかった。そこで、きじっ子の森と繰り返しかかわることで、自然のよさに気付き、自然で遊ぶことを楽しみながら愛着をもってほしいと考え、研究主題を設定した。

２　活動計画（１５時間完了）

【仮説Ⅰ】きじっ子の森とかかわる活動の時間を確保し、きじっ子の森のよさを再確認する場を設定することで、子どもたちが自然と触れ合うことを楽しみ、愛着をもつことができるであろう。 〈手だて①〉　きじっ子の森に出かけ、自由に遊ぶ時間を設定する。 〈手だて②〉　きじっ子の森で見つけた自然物「宝」を使って遊んだり作ったりする時間を設定する。 〈手だて③〉　きじっ子の森に６年生を招待したり、きじっ子の森に手紙を書いたりする活動を設定する。
【仮説Ⅱ】森で見つけた宝について伝え合ったり、「宝の地図」を作ったりすることで、子どもたちがきじっ子の森の自然のよさや自然で遊ぶことの面白さに気付いていけるだろう。 〈手だて④〉きじっ子の森や、友だちとかかわって宝で遊んだり作ったりする時間の後に、伝え合いの場を設定する。 〈手だて⑤〉「宝の地図認定会議」で認定された宝を地図にまとめる。

○研究の仮説と手だて

・きじっ子の森で遊ぼう①②③

⇒きじっ子の森で遊び、楽しかったことや見つけたものを伝え合う。

・見つけたよ！ぼくの宝・わたしの宝④⑤⑥⑦

⇒きじっ子の森で集めた自然のものを使って、遊びや作品を作る活動をする。また、個人の地図に、宝を見つけた場所を記録する。

・宝の地図認定会議⑧⑨⑩

⇒きじっ子の森の宝で作った遊びや作品を発表し、宝を認定し合う。認定された宝は、みんなの宝の地図に載せることで、きじっ子の森に宝がたくさんあることを実感する。

・６年生を森に招待しよう⑪⑫⑬⑭

⇒いつもお世話になっているが、きじっ子の森のことはあまり知らない６年生を案内する。

・きじっ子の森さんへ⑮

⇒きじっ子の森に手紙を書く。

３　活動の概要

(1)　きじっ子の森の自然の中で楽しむＡ児＜手だて①④＞

Ａ児は、おにごっこをしたいという思いをもって、本単元で１回目にきじっ子の森を訪れたが、道中の下り坂で滑って転んだ。それを「土の滑り台だ！」と言い、周りにいた友だちと楽しそうに滑り

始めた【資料１】。活動後、きじっ子の森で見つけたことについて伝え合いをすると、Ａ　児は「土の滑り台を見つけた」ことや「また土の滑り台を滑りたい」ことを発表した。振り返りでは、「つちのすべりだいをかいぞうしてたのしくしたいです」と書いた。A児が自然と触れ合うことを楽しみ始めたことがわかる。

【資料1】土の滑り台

⑵ 友だちと伝え合うことでいろいろな宝を見つけていくＡ児

＜手だて①②④＞

１回目にきじっ子の森で遊んだときの伝え合いで、B児が、どんぐりをいっぱい入れているたんけんバッグを披露した。それを見た子どもたちから「宝集めみたい」と声があがり、森で見つけたものを「宝」と呼ぶことにした。A児は、B児のたんけんバッグを何度も覗き込み、「ぼくもどんぐりほしいなあ」とつぶやいていた。

２回目にきじっ子の森に遊びに行く日、A児はビニール袋を家から持ってきた。どんぐりをたくさん集めようと考えて準備したことが伝わる。友だちにどんぐりがたくさん落ちている場所を教わり、次々と拾った。また、なかよしの友だちが大きな枝を持ち帰っていることにも気付き、大きくて長い枝を探して持ち帰った【資料２】。その後の伝え合いの場では友だちが集めた宝について拾った場所を質問し合う姿がみられたため、記録ができるように個人用の宝の地図を持っていくことにした。

【資料2】宝集めをするA児

３回目以降、A児はきじっ子の森に行くたびに宝で地図が埋まっていった。A児はきじっ子の森には宝がたくさんあることに気付いた。

⑶ 宝での作品作りを楽しみ、愛着をもちはじめたＡ児 ＜手だて②④＞

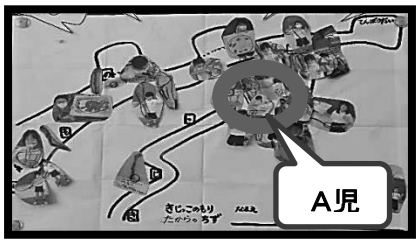
宝が集まってくると「宝で遊びたい」「宝で何かを作りたい」という思いをもった子がいたため、宝で遊んだり作ったりする時間を設けた。C児のどんぐりごまを見て、A児も製作への意欲を示した。A児は集めた木の枝を組み合わせて「スプラローラー」（ゲームに登場する武器）を作り始めた。アイデアが浮かばず悩む姿がみられたが、友だちから「ローラーに木の枝をくっつけたら？」などとアドバイスを受け、「木をくっつけて、ローラーをもっと大きくしたい」という思いをもち、製作を楽しんだ【資料３】。

【資料3】スプラローラーを作るA児

完成すると「よっしゃあ。これで遊べるぞ」と床を滑らせるようにして遊んだ。片付けるときは友だちと一緒にスプラローラーをそっと持ち上げ、抱きかかえながら運ぶ様子がみられたことから、作品に愛着をもち、大切にしていることがわかる。

⑷ 友だちの作品から自然のよさに気付くＡ児＜手だて④⑤＞

宝を使って、遊びや作品を完成させた子どもたちから、「見て見て」という言葉が飛び交うようになった。そこで、宝の地図認定会議を設定した。この会議は、各々が集めた宝で作った遊びや作品をみんなの前で発表する。「すごい」「かわいい」「かっこいい」「いいね」と褒められたら、その宝は認定され、「みんなの宝の地図」に掲示される【資料４】。



【資料4】完成したみんなの宝の地図

A児は友だちからアドバイスを受けたことで、自分の宝や作品に自信をもち、木の枝の認定会議を楽しみにしていた。

木の枝の認定会議で、A児は、木の枝の「盾と矛」を借りて遊んだ。両手にそれぞれ携え、二つの武器で一つの作品になっていることに感心した。また木の楽器を作った友だちの作品の音色を聞いて、叩く場所によって音が違うことにも気付いた。A児は「同じ木だけど、自然のものだからみんなちがう」と自然のものだからこそ、同じものは一つもないことに気付き、自然のよさを実感していた。

⑸　きじっ子の森とかかわり続けることで、森の魅力に気付き自ら伝えたA児＜手だて③＞

「きじっ子の森は西浦小みんなの場所だから、他の学年の人にも楽しいって教えてあげたい」と発言した子をきっかけに、６年生を招待することになった。A児は、自分の地図とみんなの宝の地図を確認し６年生に自慢のきじっ子の森を案内する意欲を高めた。

当日は、土の滑り台を中心に、自分の地図を見ながら６年生を案内した。土の滑り台を滑ると６年生は「おお、すごいすごい、めっちゃ滑る」と楽しんだ。A児は「落ち葉を敷くともっと滑るよ」と教え、６年生と一緒に何度も滑っていた。

後日、６年生からお礼の手紙が届いた。「土のすべりだいめっちゃたのしかったよ」と書かれていた。A児が伝えたかったきじっ子の森のよさが伝わり、満足げな様子がみられた。

⑹　きじっ子の森に手紙を書き、愛着を深めたA児＜手だて③＞

単元のおわりは、きじっ子の森への気持ちを言葉で表現するために、手紙を書いた。A児の手紙には「たからがいっぱいある」「いろいろなあそぶものがある」と、きじっ子の森と繰り返しかかわったことで気付いた思いが書かれていた。さらに「もっとあそびたいね」「大すきだよ」ときじっ子の森に対して、友だちに語るように書かれていることからも、きじっ子の森のよさを実感し、愛着をもってかかわってきたことがうかがえた。

４　実践のまとめ

○　きじっ子の森とかかわる時間を確保し、何度もかかわったことで森を訪れることを楽しみにする姿があった。また、森で見つけた自然の遊び「土の滑り台」を楽しみ、森で見つけた宝を使って夢中になって制作し続けることで、できた作品が大切なものとなった。単元のまとめで６年生を招待したことで、きじっ子の森のよさを改めて実感し、さらにきじっ子の森に愛着をもったからこそ、手紙で思いを表現することができた。何度もかかわる場や思いを再確認する場は、愛着をもつために有効であった。

○　見つけた宝を伝え合ったり、宝の地図を作ったりしたことは、自然のものが宝であることに気付くきっかけになった。さらに宝を使って作品を作り、認定会議を行うことで、友だちの作品や作品に使われている宝のよさを見つけ「自然のものだからみんなちがう」と自然そのもののよさにも気付くことができた。その後、宝の地図を見ながら、６年生を招待したことは、きじっ子の森の自然のよさや自然で遊ぶことの面白さに気付くために有効であった。

●　わかりやすい活動にしたいと考え、きじっ子の森のどんぐりや木の枝などの、自然のものに限定して宝の範囲を絞った。しかし繰り返しきじっ子の森を訪れれば訪れるほど、子どもたちは、丸太のような自分の身体よりも大きな木に目をむけ、土の滑り台、展望台から見える景色、走り回って遊んだ広場もすべて宝だと表現し、親しんでいった。

自然そのものに愛着をもった子どもの気付きや興味関心を把握し、思いを大切にしながら個に応じた学びを支える授業づくりをしていきたい。